

「東北グローバル考古学—宮城の先史を再発見—」⑧

『縄文』への道

阿子島 香

はじめに

館長講座も第8回、最終回となります。副題は「日本版の新石器時代へ」としました。今回は、後期旧石器時代から「縄文時代」に移り変わるというのは、世界史的に見てどのようなことだったのでしょうか、あらためて考えてみたいと思います。グローバルな観点から、日本列島の新石器時代を考えてみます。教科書や参考書にありますような、「縄文時代は世界の新石器時代にあたる」という理解でよいのかどうか、見直してみましよう。

氷河時代が終わって、急激な地球温暖化が起きますと、人類はそれぞれの地域で、その地域に適した新しい生活様式を確立していきました。日本の考古学界では近年「縄文化」という用語が頻出するようになってきました。それは、やはり地球的に見ても独特の意義を有する「縄文時代への変動」を、多面的に考えていく方向性の表現のように思われます。単に、土器が出現した年代は世界的にも古く、土器は縄文土器で、それ以降が縄文時代で日本文化の原点、といったシンプルな図式を見直して、もう少し複雑な実態について、東北地方の遺跡を取り上げて、事例を紹介しながら考えてみます。

旧石器時代末期の世界で

講座第6回、第7回では、後期旧石器時代には石器製作技術が非常に複雑化して、極小型の細石刃文化が日本列島に広がる様子を、また氷河時代の末期に起きた急激な気候温暖化の変動状況を見てきました。ヨーロッパ大陸では人間集団の北方への再拡大がありました。フランス北部ではクロマニヨン人の一派が、トナカイ狩猟に特化して、マドレーヌ文化末期の、高度な移動生活を展開しました。一方、アメリカ大陸への人類移動にも目覚ましい動きがありました。極東シベリアから、広大なベーリンジアの陸地を通り、氷河後退によりカナダ西部に開いた南北ルートを経て、爆発的な人間集団の拡散が起きました。その姿は、「パレオインディアン文化」の遺跡に知ることができます。モンタナ州ミルアイアン遺跡を紹介しました。投槍器を携えた北米最初のバッファローハンターたちでした。それらの文化と同時代の出来事として、今回は東アジアの中での日本列島の動向を考えてみます。

土器の発生は、世界の中でも東アジア地域で最初に起きました。1960年代に判明した、長崎県佐世保市福井洞窟遺跡(当時吉井町)の、第3層隆線文土器の層の、C14年代測定値、

12700±500BP、12400±350BPなどは、当時の世界考古学では常識ハズレと言われるような数値でした。しかし、その後次第に類例は増加して、現在では土器出現期の正しい年代観が当初（50年以上も前です！）からあったと、学史的に評価されています。さらにその後、日本列島だけが古い土器を出土するのではなくて、東アジアの広域で、同様に古い時期に出現した土器が報告されてきました。

大平山元 I 遺跡と最古級の土器

大平山元遺跡群は、青森県外ヶ浜町（旧蟹田町）にある、旧石器時代から縄文時代にかけての複合遺跡です。そのうち第 I 遺跡から、1998年に、無文土器を含む文化層が発掘されて、年代測定が実施されました。土器の付着物の年代が、約16500年前と判明して、「縄文時代の開始が3000年ほども遡る」として、報道等でも大きく取り上げられました。実は、この年代は、当時進展が著しかったAMS法および「暦年較正」年代（calBP）で、従来のC14年代ですと、13000BP台です。もちろん十分に日本列島最古級の土器ですが、福井洞窟などの年代とは、数千年もの差を示すものではありませんでした。むしろ、年代測定法が進歩、精緻化した、という捉え方が正確でした。当時このニュースはややセンセーショナルでしたし、また少しややこしいので、私は大学の講義で、考古学の方法を考える良い材料に詳しく話した記憶があります。

ともあれ、土器は破片ですが、無文土器すなわち文様の施文が認められないものです。現在、日本列島の最古級の土器は無文土器とされる有力な根拠となっています。一緒に出土した石器は、それまで旧石器時代の最末期とされてきた「神子柴・長者久保石器群」の組成でした。この石器群は大型の石斧（刃部だけを磨いた「局部磨製石斧」もあります）、大型の尖頭器（石槍）、スクレイパー、石刃などを特徴として、北方アジア系の文化とされてきました。長野県南箕輪村、神子柴（みこしば）遺跡が有名です。長者久保遺跡は青森県です。旧石器時代から縄文時代への移り変わりを探る上で、たいへん重要な石器群といえます。

東アジアの最古級の土器出現

20世紀イギリスの偉大な考古学者、ゴードン・チャイルドは、土器の発明は人類が化学変化を意識的に応用した記念すべき出来事であったと、土器の意義を述べました。

しかし、初期の土器が発生してくる状況は、どこかにあった、ひとつの「偉大な発明地」から伝播していったのではないようです。むしろ、それぞれの地域での生態学的な人類集団適応のプロセスの中で、氷河後退期に多地域で出現し、拡大していったと考えられます。土器の意義、土器でいったい何をしたのかは重要な問題で、諸説ありますが、その問題の実証的な追求は、目下、各国研究者の先端的課題になっています。年代測定法の精緻化とともに、土器の使用対象についての、同位体分析などの理化学的手法も進展してきました。土器の発生というと、かつては西アジアの農耕文化のイメージが強く古典的で、穀物栽培

や貯蔵を連想します。しかし北アジアの土器付着物の分析では、サカナ類の脂分を示唆する結果もあります。

東アジアの土器出現の地域と年代を見てみましょう。東京大学の佐藤宏之氏(2019 p.114)が、4地域をまとめています(スライド)。

- 1、東・南中国(寒冷期) 22000年前～。
- 2、日本列島(向温暖期) 16500年前～。
- 3、沿バイカル・アムール地域、北海道(温暖期) 14800年前～。
- 4、中国北部・北東部(寒冷期) 13000～11700年前。

このように、東・東北アジアの各所で出現する土器は、最初の出現地から同心円状に分布が拡大したり、寒冷・温暖といった気候変動に連動したりするものではなく、土器出現を単純に説明するのは困難であるとされます(佐藤 2019)。

福井洞窟の発掘調査

土器出現期の代表的な事例として、長崎県佐世保市福井洞窟(洞穴)を紹介しましょう。先に触れましたように、1960年代前半に、3度にわたって発掘されました(芹沢長介氏、鎌木義昌氏)。ここでは、細石刃と土器が共伴(一緒に出ること)し、洞窟堆積物の層位的な調査の、当時の模範的な調査といえます。第1層から早期縄文土器、第2層から爪形文土器と細石刃、第3層から隆線文土器と細石刃、第4層では土器はなくて細石刃、第7層は小石刃(13600±600年BP)、などです。主要な出土品をスライドで紹介しましょう。有孔石製円盤、有孔土製円盤もあります。細石刃石核の接合資料もあり、製作過程がわかります。東北大学に収蔵されている資料があまりに膨大で、歴代の研究室メンバーが整理を重ねて、ようやく2015年に、正式調査報告書の刊行ができました。約7万点以上あります。報告書は、東北大学附属図書館のインターネット機関レポジトリにて、どなたでも無料でダウンロードできます(総合学術博物館の項)。

福井洞窟は、佐世保市教育委員会によって、2012～2013年に再発掘調査が行なわれました。大規模な調査でした。報告書も刊行されています。文化庁による巡回展「発掘された日本列島」でも、2015年度に取り上げられています(柳田裕三 2015)。一般に、洞窟内部の堆積層というものは、非常に複雑です。さまざまな土層堆積の要因が複雑に関連します。今次の調査では、かつてのトレンチでの層位的所見と照合する努力に、顕著なものがありました。第12層では、炉跡が見つかりました(17500～18000年前)。黒曜石製の細石刃と細石刃核の42点の接合資料からは、製作方法が復元できます。第13層では、洞窟の入り口付近に、玄武岩を帯状に並べた石敷遺構が見つかりました。

佐世保市は、発掘調査と史跡整備に力を注いで、2021年4月には「福井洞窟ミュージアム」が開館しました。東北大学の調査資料も展示に含まれ、地元の皆様にも観覧いただいております。コロナ禍でまだ果たしていませんが、私も遺跡再訪を楽しみにしています。

仙台市野川遺跡

次に、身近なところで仙台市の遺跡を紹介しましょう。野川遺跡は、青葉区熊ヶ根にあります。広瀬川の支流青下川に面した河岸段丘上に立地しています。大倉ダムや定義如来へ行く途中の新青下橋近くになります。1991年に道路拡幅工事に伴って、仙台市教委が調査し、縄文後期の下層から、縄文草創期の土坑（穴）が2基、検出されました。土坑からは、両面加工の石器（バイフェイス）や、籠状の石器、剥片などが、埋められた状態で出土しました。山形県最上川流域産の硬質頁岩で製作された石器が、穴の中に埋蔵された状態（キャッシュといわれる種類の遺構）は、当時の人間集団が、山形県側と宮城県側を往復していた生活を示唆し、学界でも話題を呼びました。同じ層位から出土した草創期の石器は、10個体ほどからの小破片です。押圧縄文という、原体を器面に押しつけてつけた文様があり（回転ではなくて）、東日本の草創期後半に多く見られる「多縄文（系）土器」に分類されます。

その後、東北大学考古学研究室は、2014年から鹿又教授を中心に、91年調査の隣接地を学術調査しました。竪穴住居状遺構、焼礫群（屋外炉）、土坑などが見付き、報告書を準備中です。矢柄研磨器、石鏃、石匙なども出土しています。C14年代は、 $10970 \pm 40BP$ が得られ、新ドリラス期（いわゆる寒の戻り）に相当することが判明しました。この遺跡は、縄文時代の定住的な要素（竪穴住居、土器、貯蔵）と、旧石器時代の伝統（移動生活に適した石器製作であるバイフェイス、遠隔地の石材活用）を併せ持つという、草創期の性格をよく表しています。

（福井洞窟と野川遺跡は、多くのスライドで説明しました）。

「草創期」という用語

縄文時代の細別時期の区分は、1930年代から層位学的な縄文土器編年に取り組んで、全国編年の大綱を確立した山内清男氏による、早期、前期、中期、後期、晩期の区分が現在も広く行なわれています。1960年代には、日本各地の洞窟遺跡などの調査から、さらに一段と古い土器文化が判明して、「草創期」が設定されました。山内は、関東地方の撚糸文（よりいともん）土器群、とんがり底（尖底土器）に軸に巻いた撚糸で縦方向などに回転文様をつける土器型式群、夏島式土器、稲荷台式土器などをいいますが、このグループと、それより古い土器群に、草創期の細分名称を与えました。

学史上で重要なのは、山内の「草創期」は、放射性炭素年代を信頼しないで、縄文時代は、約5000年前頃に始まるという学説（「短期編年論」）と、一体の考え方だったことです。しかし、現在では、今日の講座でも話している年代観、すなわち草創期はC14年代で約12000年BP、暦年較正ですと約15000年前まで遡るといって、定説の年代観を前提として、この時期細分（草創期）が広く使われています。そして、撚糸文土器群は、一般的に早期に入ります。少し、ややこしいですね。ついでながら、私達は研究の歴史を時々忘れがちになりますが、先学に対する尊敬という意味でも、やはり研究史を忘れないということは、大事

なことのように思われます。失礼しました。

縄文時代を二区分する考え方（中石器時代と新石器時代）

縄文時代の時期区分を年代の長さという面で見ると、草創期（約 15500 年?～約 11500 年前）と、早期（～約 7000 年前）の継続期間は、非常に長いことが分かります。その後の前期、中期、後期、晩期、と名前では同等区分でも、タイムスパンの長さは格別です。教科書的には「縄文時代は世界の新石器時代にあたる」と簡単に書かれることが多いですが、館長の学説では、草創期から早期後半までは、むしろヨーロッパでの「続旧石器時代」（Epi-Palaeolithic Period）ないし「**中石器時代**」（Mesolithic Period）の文化段階に対応するように思われます。

ヨーロッパの中石器時代については、前回の講座でも紹介しましたが、農耕文化は採用しなくても、あるいは南東方面から到達しなくても、漁撈文化を重要な文化要素として持ち、弓矢による狩猟、採集を基調としながら、土器を製作し（非農耕文化での土器の一般化）、かなり定住的で、豊富な骨角器を伴う貝塚文化を残しました。大型の石斧も各地にあり、森林伐採が盛んであったことを示しています。スペインのカンタブリア地方は温暖ですが、中石器時代の貝塚はたくさん残されています。デンマークなどのマグレモーゼ文化、エルテベレ文化などで、小型の石器（細石器）を多数製作しました。イングランドのスター・カー遺跡が、水辺の暮らしのマグレモーゼ文化遺跡として著名です。デンマークのマグレモーゼ遺跡から出土した、細石刃多数を柄に装着した貴重な実例をご紹介します（東北大学所蔵）。

以前に説明しましたフランス南西部のドゥフォール岩陰遺跡の調査では、後期旧石器、マドレーヌ文化後期の第 4 層から、累々とした礫敷遺構が発掘されました。トナカイの集約的狩猟民の滞在地でした。その上層（第 3 層）は、アジル文化期に属し、小型化した尖頭器、拇指状エンドスクレイパーなど、中石器文化の様相に変化します。そして温暖化した時期に、次第にアカシカへと狩猟対象が変化していきました。

縄文時代の文化内容を詳しく考えてみますと、早期後半、あるいは早期から前期に移行するあたりに（列島内各地でも、前後があるようです）、大きな社会的、文化的な画期が認められるようです。たとえば土器型式の分布圏のサイズも、かなり変化します。館長学説では、アメリカ新進化主義人類学（エルマン・サーヴィスなど）による「社会文化的統合のレベル」（Level of socio-cultural integration）における大きな変化が、このあたりにあるように見えます。もう少し仮説的に言うと、バンド社会から部族社会（band society to tribal society）ということになりますが、この問題は人類学理論的にも複雑ですので、今後、取り組んでいきたい仮説と考えております。単に縄文時代の継続期間が非常に長くて、年代でちょうど半分くらいまで、早期である、ということではありません。

時代区分に関しては、芹沢長介教授は、縄文時代草創期に当たる時期について「晩期旧石器時代」と区分していましたが、このような考え方も再評価されてよいのではないでし

ようか。土器が出現したから新しい時代（いわゆる「土器革命」説）、と考えるより、当時の文化全体の姿を考察する、また世界各地の同時代の文化と比較して考察する、という考え方です。

時代区分の歴史から

講座では、時代区分についてヨーロッパの研究史と事例も振り返りました（スライド）。デンマークのトムセンは、コペンハーゲンの国立古物博物館で、収蔵資料を利器の材質で時代区分していく「三時代法」を提唱しました（1832年）。石器時代、青銅器時代、鉄器時代です。余談ですが、シルクハットをかぶったスタイルで観客に説明する、この版画のように、欧州のジェントルマン的な雰囲気漂っているのは、当時の確立期の考古学が、ブルジョアジーに支えられていた面も感じさせて興味深いことです。またヨーロッパでは、世界の各地からの珍しい物品を集めた「驚異の部屋」（room of wonder）に人気が集まっていたのも、この頃のことでした。博物館の歴史という面でも、興味深いところです。

イギリスのジョン・ラボックは、石器時代を二分して、旧石器時代と新石器時代に分けました。磨製石器の使用を重視したのでした。1865年に『先史時代』（Prehistoric Times）を刊行しています。その後、旧石器時代と新石器時代との間に、大きな溝がある、という「溝渠説」問題が論じられました。その中で、E. ピエットは、フランス南端ピレネー地方のアリエージュ県にあるマス・ダジュール洞窟を発掘して、新旧の両石器時代をつなぐような石器文化を見出しました。1887年から1889年に発掘され、細石器、小型のアジル型尖頭器、彩色を施した小礫などで特徴づけられるこの文化は、遺跡名から「アジル文化」と名付けられました。そして、1909年に、ドゥ・モルガンによって「中石器時代」が提唱されたのです。

時代区分については、以前に辞典の項目執筆をしたことがあり、現在も重版されていますので、興味ある方はご覧ください（『新日本考古学小辞典』）。

複線化した人類史

さて、温暖化した地球上では、各地の人間集団は多様な生活様式を発展させていきました。生業経済や、文化的要素、文物の種類と、それらの間の組成（組み合わせと比率）、居住様式（セトルメントパターン）、いずれに関しても、大きく多様化が進行しました。農耕を開始した地域のうちから、やがて古代文明への道に至った地域も現れました。家畜を飼養する牧畜や、移動して生活する遊牧を発達させた地域もありました。本講座でも話題にしました、世界各地の「後期旧石器時代の文化に共通する性格」とは、好対照を見せます。いわば、時代性が地域性を凌駕する氷河時代の文化から、地域ごとに多様な適応をしていくというように、人類の文化戦略が、変化していったのだと評価できるでしょう（館長学説）。

日本列島においては、いちはやく土器が一般化したのですが、農耕は遅くまで採用し

ませんでした。狩猟採集と並んで漁撈が重要となりました。多くの貝塚が、海岸部のみならず、内陸部にも残されました。竪穴住居がまとまる集落が形成されました。定住 H/G (ハンター・ギャザラー) として、複雑な社会組織と観念体系、地域ブロックごとに特有の土器文化が高度に発達しました。これらを総合的に評価しますと、先述のアメリカ新進化主義人類学という「部族」段階(類型)の社会、と考えられると思います。個々の集落とその構成員を大きく超える「汎部族的ソダリティー」の恒常的存在を仮説的に考え、考察していきたいと思います。

縄文はいつから? という問いかけ

「縄文時代はいつから始まったのだろうか?」という問いかけには、二つの意味があるでしょう。一つは、土器出現期の年代観についてです。青森県大平山元 I 遺跡での無文土器は 15000 年以上前(暦年較正年代)と判明しました。日本列島の草創期の土器は、大きく捉えて「隆線文(隆起線文)土器」「爪形文土器」「多縄文(系)土器」という順序で変遷することが分かりました。

(東北地方各地の草創期土器と、伴出石器をスライドで紹介。青森県大平山元 I 遺跡、同表館(1)遺跡、岩手県大新町遺跡、同上台遺跡ほか)。

もう一つの意味としては『縄文』文化の内容が確立したのは、いつ頃で、どのようなプロセスで、という問いがあるでしょう。講座では、仙台市野川遺跡の事例を詳しく紹介して考えました。東北地方では、草創期の遺跡として山形県高島町周辺の洞窟遺跡群(日向洞窟ほか)が研究史上も重要で、よく知られています。近くには山形県立の考古学博物館(「うきたむ風土記の丘考古資料館」)もあります。一日の歴史探訪お出かけなどにも、いかがでしょうか。高島から米沢あたり、皆さんご承知のように、史跡など歴史探訪の場所が多いですね。失礼しました。

縄文文化の確立にとって、指標となるような事項についても考えてみましょう。どれが最も重要な要因か(原動力的要素)ということは難しく、順不同となりますが、組み合わせとしての文化内容といえます。石鏃の一般化(弓矢による狩猟)、土器製作の各集落での普遍化、調理の方法と対象の拡大、貝塚の出現と漁撈活動の展開、居住施設としては竪穴住居、そして竪穴住居がまとまって存在する集落形態の出現、遺跡での定住生活を示す様相、磨製石器の日常的な使用、縄文時代に特徴的な遺物の出現(土偶、石匙など)、猟犬の存在、その他さまざまな「文化としての統合的な全体性」(culture as integral whole)があります。

一方で、日本列島全域が同じような文化様相を持ってまとまるという訳ではなく、地域による変化にも大きいものがあります。その意味では、微妙な表現ではありますが、ひとつのまとまった実体という、「これが列島全体の縄文文化」は、実は存在しないのかもしれない。

文化の全体性とは、プロセス考古学で論じられてきた考え方で、文化を構成する諸要素

は、バラバラではなくて相互に有機的な関係を有するまとまった構造をなすという、文化人類学の概念に近いものです。かつてフラナリーは、文化システム論を標榜して、要素間の関係にポジティブ（相乗的変動）とネガティブ（平衡状態維持的）のフィードバックがあるとして、文化変化を論じました。

おわりに

いずれにしましても、縄文文化が、現在の日本文化の基盤となったことには疑いはありません。弥生稲作を中心とする伝統的な日本文化の、そのまた基層に存在するベースとして、非常に長期間にわたって続きました。そして、そのまた基層には、縄文文化が成立する前提となった後期旧石器文化が、二万年以上にわたって、日本列島にしっかりと根付いていたことも、忘れてはならないと思います。

4月以来、毎月の館長講座には、大勢の方にご来館いただきまして、まことに有難うございました。途中、コロナ禍により延期をやむなくされたこともございましたが、都合8回の講座を完結することができました。私達の郷土である宮城県、またふるさと東北の地で、祖先から受け継がれてきた文化財は、広く世界の歴史のなかで、どのような意義を持っているのだろうか、私なりに考えてきたこととお話してきましたわけですが、これまでとは少し違った視点から、郷土の遺跡を見直すきっかけになることがあれば、大きな幸いを感じるどころです。

当館は今年度、このコロナ禍の中でも、1日もそのために閉館することなく、できる限りの対策も講じて、活動を継続して参りました。厳しい日常が続きますが、それだからこそ、どうぞ博物館にご来館いただいて、私達のたどってきた歴史を考えながら、あるいは気持ちを癒やし、あるいは心を豊かにされ、あるいは家族や仲間と絆を深める、そのような施設であり続けたいと希望しております。

みなさま、どうも有難うございました。

参考文献

阿子島香（2005）「時代区分」『新日本考古学小辞典』所収。ニューサイエンス社。

阿子島香編（2015）『北の原始時代』吉川弘文館。

阿子島香・溝口孝司監修（2018）『ムカシのミライープロセス考古学とポストプロセス考古学の対話ー』勁草書房。

鹿又喜隆，村田弘之，梅川隆寛，阿子島香，柳田俊雄，他 5 名（2015）「九州地方における洞穴遺跡の研究-長崎県福井洞穴第三次発掘調査報告書」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No.14, 5-190 頁。

佐藤宏之（2019）『旧石器時代：日本文化のはじまり』ヒスカルセレクション考古 1、敬文舎。

仙台市史編纂委員会編（2005）『仙台市史 通史編 1 原始 改訂版』（阿子島分担執筆）。